

■**洲之内徹** **美術エッセイスト、画廊主。異色の画家を発掘し続け、長期連載エッセイ「気まぐれ美術館」は多くの一流読者。**

すのうちとおる

大正政変・・1913＝ 愛媛県松山で、有名陶器店を経営するクリスチャン一家の子に生まれる。

原敬首相暗殺1921＝ 8歳：
水平社結成・1922＝ **9歳**：

敬虔な信徒の母に反発し、キリスト教嫌いになるも、生涯母に愛着し続ける一方、年とともに、鼻の高い白人のような風貌になり、のちの女性関係の一つの原因にもなる。松山中学では、頭脳の明晰さと嫌悪する相手を容赦なく傷つけることから、“刺刀のスノさん”の異名。

円本時代始・1926＝13歳：10歳上の先輩で**画家重松鶴之助が第一回聖徳太子奉賛展**に出品した**「閑々亭肖像」**を見て、自分で持ちたい衝動が起こり、**のちにエッセイに“青春の象徴”と記す。**
美術に進もうとするも両親の反対で妥協し、

海軍軍縮条約1930＝17歳： **東京美術学校建築科に入学。大久保百人町の下宿で、重松と一緒にあって強く影響を受け、**

満州事変・・1931＝18歳：日本プロレタリア美術家同盟に参加、

五一五事件・1932＝19歳：日本共産青年同盟にも参加して検挙され、学校は退校処分となって帰郷した。松山でも運動をつづけ、

国際連盟脱退1933＝20歳：この年、重松が検挙されたのに関連して、徴兵検査後に検挙・収監されたが、

帝人疑獄事件1934＝21歳：‘転向はできないが活動は止める’と誓約して釈放され、同人雑誌{記録}にエッセイと文芸評論を寄稿し、

芥川直木賞始1935＝22歳：重松の依頼で、本を差し入れたりするうち、

日中戦争始・1937＝24歳：

健保+総動員 1938＝25歳：この年、重松が満期釈放の朝、刑務所の三階から飛び降り自殺したのも知らず、応募して軍の宣撫班員に、元左翼が理由で合格、中国大陸へ渡り、自らは望まない対共工作と情報収集に携わり、辣腕ぶりを発揮、

第二次大戦始1939＝26歳：左官待遇の長にまでなる一方、同僚の田村泰次郎と親友になり、軍人からの要求を果たす以外は、自らの生活に沈潜、{四国文学}と改題された同人誌にも、「アンナ・カレーニナ」などの寄稿を続け、

大政翼賛会・1940＝**27歳**：この間、部下の女性と結婚し長男ができるも、次々、女性関係、妻は離婚を考えるも、

日米開戦・・1941＝28歳：

敗戦・・・1945＝32歳：終戦を迎え、

新憲法公布・1946＝33歳：郷里松山に引き揚げて古本屋を開業、重松の死も知って衝撃を受け、生涯解き明かしたい謎になり、重松の影響を受けて以降の自らの精神遍歴を綴るべく、**初めて小説を書き始め、**

極東裁判決・1948＝35歳：「鷹」が第1回横光利一賞の候補、

三大事件・・1949＝**36歳**：「雪」が第2回の候補になる。中国時代の友人田村泰次郎の紹介で{群像}誌に「橐の木の下」を発表、

朝鮮戦争始・1950＝37歳；長編かつ小説の代表作ともいえるが、上半期の芥川賞候補になると、参考作品として、自らの生き様を露骨に示す「掌のにおい」を書くなど、わざわざ審査員の評判を落とし、「砂」が下半期の芥川賞候補になるも、**いずれも評価されたが、底知れぬ虚無と自己愛の複雑な混淆があって敬遠されて受賞に至らず、結果として、小説家にならずに、新たな道が開けることになるのである。**

独立回復・・1951＝38歳：

メデー事件・ 1952＝39歳：田村の勧めで上京。戦前にあった「愛媛県民歌」が敗戦で歌われなくなったため、県が「愛媛県民の歌」の作詞を公募した際、その審査委員の一人を務め、該当作が無かったため、依頼されて作詞を行い、近衛秀麿の作曲を経て制定される。この間、松山に置いてきた妻子が上京、知人の家に部屋を借りて別居させ、一気に生活苦になり、やがて妻子は京都の弟の家に行くも気まづくなり、以後、転々と別居したままの生活になるが、**‘なげなしの金を几帳面に送り続ける一方、女性遍歴は相変わらず、また、それまで体験してきたことから、全て’なるようになる’**と達観し、結果責任は全くとらないものの、決して嘘はつかない生き方が身につくことになり、その風貌と相まって、独自の世界を持った女性たちがよってくるのを拒まず、生涯、数多くのドラマを生み、このことが、のちの美術エッセイの糧になったことも間違いない。

インスタントメン・1958＝**45歳**：

美智子妃・・1959＝46歳：美術マニアでもあった田村がこの年西銀座に開いた{現代画廊}に入社、田村が目的とした国内外の抽象絵画の紹介には興味が湧かなかったが、

安保闘争・・1960＝47歳：

タイタイ病始・1961＝48歳：経営不振で田村が手を引くと、***{現代画廊}の経営を引き継いで画商になり、同じビルの3階へ移って、{萬鉄五郎展}で新装開店。この間も小説を書き続け、松山の同人誌{文脈}に発表した「終りの夏」が、**
全国総合計画1962＝49歳：「久しぶりに3度目の芥川賞候補となるも、やはり受賞を逸し、{文学界}に、「雪」を改題した「流氓」が掲載されるも、以後、小説は中断。10年近く前に鉄道自殺した画家吉岡憲について、原稿を書くもボツになり、現在も読むことができないが、その後、{愛媛新聞}の美術欄に、美術エッセイを2年連載、

いざなぎ景気1966＝53歳：小説では「橐の木の下」のみ出版された。

美濃部都知事1967＝**54歳**：

霞ヶ関ビル・ 1968＝55歳： **銀座6丁目の松坂屋の裏手にある古いビルの3階に引っ越し、’銀座で一番ちっぽけな画廊’と自負する“洲之内徹の現在画廊”の時代が始まる。最初に、かねてから想を温めていた{鑑光画稿展}開き、その後もさまざまな異色の展覧会を企画・開催して、没するまでの約20年間に260回を超え、多くの個性あふれる人々が往来することになる。この頃、{現代画廊}に持ち込まれた、13年前に死去した佐藤哲三の作品に惹かれ、**

全共闘・・・1969＝56歳： **佐藤哲三の遺作展を開くべく、絵の蒐集を兼ねて、新潟にでかけ、{芸術新潮}に、初めて美術に関する文「北陸に埋もれた鬼才・佐藤哲三」を発表、エッセイストとしての新たな出発になり、以後、新潟県との深い関係が始まるだけでなく、しばしば物故した画家の遺作展を開いて、多くの画家を発掘、紹介して行き、自分が‘佳い’と思った多くの無名画家に個展の場を提供していく。**

ドルショック・・1971＝58歳：新潮社出版部の人から勧められて、「絵の中の散歩」という美術エッセイを書き溜め始め、

石油ショック1973＝60歳：この年、県成立100周年を記念して県民歌「愛媛の歌」が制定されたことに伴い、20年前に作詞した「愛媛県民の歌」は廃止された。またまとところで**新潮社から、美術エッセイ集「絵の中の散歩」を刊行して好評、**

角栄金脈辞任1974＝61歳：第一回到、編集部の有名画家という希望に抗して、佐藤哲三と同時代ながら無名の新潟の画家佐藤清三郎を取り上げ、***{芸術新潮}に、美術エッセイ「気まぐれ美術館」の連載を始めると、さらに好評で、文芸評論家小林秀雄から’いま一番の批評家は洲之内徹だ’と激賞され、青山二郎は’{芸術新潮}では、洲之内しか読まない’と公言し、白洲正子に洲之内のエッセイを読むよう勧めている。自らの作家生理に合った連載で、この間にも、有名婦人雑誌の女性編集者を最後のパートナーに、男の子まで儲けている。**

田中角栄逮捕1976＝**63歳**：この年、東京の近代美術館で開催された{ドイツ・リアリズム展}に行き、フランツ・レンクの「じょうろとバケツと箱のある静物」に感動し、ケーテ・コルヴィッツの「ロシアを救え」に涙する。

成田衝突・・1978＝65歳：それまでの連載を「気まぐれ美術館」として出版、

貿易摩擦始・1980＝67歳：「帰りたい風景 気まぐれ美術館」、

・・・・・1981＝68歳：この年、NHK日曜美術館で、{私(山本薩夫)と重松鶴之助}放映、

中曽根内閣・1982＝69歳：

ドイツユーラト・ 1983＝70歳：別の出版社から「洲之内徹小説全集(1)(2)」も出版される。「セザンヌの塗り残し 気まぐれ美術館」、

ジャンボ機墜落1985＝**72歳**：「人魚を見た人 気まぐれ美術館」と、連載がある程度続いた都度、単行本として出版、

「気まぐれ美術館」は休載なく足掛け14年、165回続くが、すでに、全身の臓器が癌に冒されていて、
竹下登内閣・1987＝74歳：**倒れ、意識不明のまま没したため、突然の終わりを告げた。**

骨壺は別居のままの妻のもとに送られ、翌年、最後の連載をまとめた「さらば気まぐれ美術館」が出版されて以降、その人気を示すように、さまざまな形で、生前の著作物をまとめた出版が続く一方、2年後には、同郷で古くからの友人大原富枝が評伝を書いている。しばしば地方の画廊と連携して、巡回展覧会を開き、売り上げ増加を図ろうとするも、オークションでの高額には疎く、本当に気に入ったものが手に入ると手元に残し、客には売らなかったのも、迷惑千万と呆れさせたりしたが、結果として、洲之内の美意識を反映し、時代を証言する貴重な作品が残り、一括して宮城県美術館に収められ、{洲之内コレクション}となった。

Wikipedia「洲之内徹」、大原富枝「彼もまた神の愛でし子か 洲之内徹の生涯」(末尾の関川夏央の解説も)、